

NEWSLETTER of the

Japanese Society for Applied Animal Behaviour

No. 1

May 2003

ニュースレター発刊に思う

会長 佐藤衆介

内田佳子会員（ニュースレター担当代表幹事）のご努力により、発刊に至りました。

昨年3月に学会が設立され、123名の参加をもって第1回設立シンポが開催されました。そこで、家畜、伴侶動物、野生動物、実験動物、展示動物における応用動物行動学について、お互いの顔合わせを行いました（内容は「応用動物行動学の黎明」（2003）に掲載）。10月には、第2回のシンポとして72名の参加を持って日本家畜管理学会・上野動物園との共催で、応用動物行動学の中で最も今日的課題である「エンリッチメント」（飼育環境の行動学的改善）研究を、動物園動物と産業動物について検討いたしました（内容は「日本家畜管理学会誌」39巻1号（2003）に掲載）。11月には、第3回シンポとして84名の参加をもって日本動物行動学会との共催で「応用動物行動学への招待」シンポを開催し、獣害に関する行動学、機械化に対する畜産動物の行動学、動物園での行動学が紹介され、さらに応用動物行動学会と日本動物行動学会の3名からコメントを頂き、実践行動学の組織化により、行動学のさらなる発展の地平が開けた印象を持ちました。そして1年がたち、15年度の最初の活動としてシンポ「使役動物の行動学 - ヒトのために働く動物たち - 」が3月30日に開催され、労役用としてのウマ、ホビー狩猟用としてのタカ、行動展示用としての動物、イヌのコマンド認知様式が紹介され、議論は懇親会まで活発に続きました。熱気は主催者側の予想をはるかに超えるものでありました。これらを通して、応用動物行動学会は「何を扱う学会」なのかが具体的に見えてきたことと思います。そして、これまで様々な学会の一角で活動されてきた実践的な行動学が横断的に繋がることで、さらなる研究展開の可能性が垣間見えてきたのではないかと考えています。会員の皆様におかれましては、「面白い学会ができたよ」と近隣の方々にも声をかけて頂き、より多くの方々が参集し、さらに様々な分野の実践行動学間の交流が進むことを期待している次第です。

また、当学会の当面の大きな活動としては、2005年に日本で開催予定の国際応用動物行動学会国際会議への準備、一般講演・学会誌の立ち上げ準備があり

ますが、その点に関しましても、さらなる皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

ニューズレター創刊号発行に寄せて 「実践の科学」

上野吉一 京都大学霊長類研究所

応用動物行動学会が昨年3月に設立されてから早1年が過ぎました。この間に会員数は100名を優に越すほどまでになっています。とはいえ、まだまだ小さなそして“貧乏”な学会です。しかし、その活動は見劣りするものではありません。この1年間に、「設立シンポジウム」を皮切りに、「秋のシンポジウム」、そして「春のシンポジウム」と3回もの集会を開催して来ました。また、日本動物行動学会では共催として、ミニシンポジウムをおこないました。いずれの集会も盛況であり、参加者の関心も高いものだったと言えます。春のシンポジウムに関しては、このニューズレターに概要が報告されています。

この3月には、「応用動物行動学の黎明」と題した、この学会が対象にしようとしている課題の枠組を網羅する300ページを越す論文集が出版されました。会員の方は既に手に取ってご覧になられていることと思います。この論文集は家畜に関するものが主ですが、この学会の視野はそこに留まらず、展示動物、実験動物、伴侶動物、さらに野生動物といったヒトと関わり合いを持つすべての動物を対象として、その行動を理解しまたそこでの具体的・直接的な問題の解決を目指そうという方向性が明確に示されるものとなっています。こうした成果をこの1年間で上げることができたのは、この学会の母体となった「家畜行動に関する小集会」がいかに活発な活動をおこなってきたかという証明だと言えるでしょう。

社会的に見ても、ヒトと動物の関係が良い意味でも悪い意味でも変化しており、その結果さまざまな動物行動学が関与すべき問題が生じて来ています。そうした問題として、「動物福祉」、「野生動物と人間の軋轢」、「伴侶動物と人間の軋轢」といったことを、佐藤会長は指摘されています。「小集会」のこれまでの活動を引継ぎ、こうした社会的要請にいかに応えられるかといった、本学会の真価がこれから強く問われることとなります。しばしば科学の世界では、純粋ないし基礎科学が“高尚”で、応用科学はどこか劣ったものと見なされることがあります。応用は眼前の問題の解決に過ぎず、科学的知への貢献が小さいということなのでしょう。しかし、こうした二分法は妥当ではないと考えます。知の当然の発露として、実践はあるのです。孟子の言葉に、「人皆有所不忍：誰もが他者の身に起ることに忍びざるものがある」というものがあります。動物

行動学を研究するわたし達は、動物がどのような存在であり、そこにどれ程の問題があるのかを ”知ってしまった” 以上、目を背けることはできないのです。まさに動物行動学を研究する者にとって、知の実践は不可避なものであり、知の探求と実践は不可分のものです。

動物行動学の主流はあたかも行動生態学のようなきらいがありますが、動物行動学が考えるべき課題はティンバーゲンが示した4つであることに疑いの余地はありません。真の意味で動物行動学を成り立たせるためには、応用動物行動学は重要な柱と言っても過言ではないでしょう。先に述べたように、その必要性もますます大きいものとなるに違いありません。

今回、新たな情報交換の場として、ニュースレターが創刊されました。会則第2条に「・・・基礎的・応用的研究の切磋琢磨を行ない・・・」と明記されているように、このニュースレターが広く動物行動学に関心を持つ人達の情報交換と議論の場となることを期待します。そして、ヒトと動物の新たな関係作りへの貢献につながっていくことを願います。そのためにも、この学会の存在を多くの人達に知ってもらい、会員となり活動に参加してもらおうよう、皆さん頑張りましょう。

2003年応用動物行動学会総会報告

1. 2002年度活動報告

(1) 幹事会報告：e-mail 上および東京大学農学部にて行った。以下の事柄について論議、検討された。

1. 学会の活動・今後の予定
2. 会員募集手続き・入会状況
3. 「応用動物行動学の黎明」の出版
4. 「応用動物行動学」の編纂
5. 国際応用動物行動学会議 (International Congress of International Society for Applied Ethology)
6. 「日本家畜管理学会」との一般講演の共同開催、学会誌の共同出版を申し入れ

(2) ISAEJapan2005 準備状況報告

1. 主催：応用動物行動学会、日本畜産学会（社団法人）、日本家畜管理学会、日本学術会議（共催申請中）
2. 後援：日本動物行動学会、独立行政法人農業技術研究機構畜産草地研究所、日本中央競馬会、日本草地学会、ヒトと動物の関係学会
3. 開催時期：平成17（2005）年8月20日～8月24日（5日間）
4. 開催場所 〒229-8501 神奈川県相模原市淵野辺 麻布大学

(注：新情報です 総会後に変更になっています！)

5. 参加予定者：350名
6. 予算：17,250千円
7. メインテーマ：ヒトと動物の共生
8. セッションテーマ：ヒトと動物の心理的關係・共生・摂食戦略

(3)シンポジウム報告

1. 第1回：応用動物行動学会設立シンポジウム(参加者：72名) 2002年3月31日 10:00-15:40、日本獣医畜産大学
2. 第2回：飼育動物の環境エンリッチメントと動物福祉(日本家畜管理学会・上野動物園との共催)(参加者：76名) 2002年10月19日 13:00-16:00、上野動物園 ホール
3. 第3回(ミニシンポ)：応用動物行動学への招待(日本動物行動学会との共催)(参加者：約85名) 2002年11月4日 13:30-15:30、立教大学池袋キャンパス

(4)出版：「応用動物行動学の黎明」426,825円 300冊

(5)会員状況：2003.02.28現在(会計年度終了時)の会員数は93名

(6)2002年度会計報告

2003.02.28

収 入			支 出		
項目	2002 予算	2002 決算	項目	2002 予算	2002 決算
前年度繰越金	0	0	印刷製本費	250,000	0
個人会費	200,000	178,000	シンポジウム費	30,000	0
賛助会費	0	0	会議費	5,000	0
寄付金	193,616	193,616	通信費	5,000	0
利息	0	0	消耗品費	60,000	56,489
雑収入	0	13,000	謝金	10,000	8,400
			国際学会開催準備費	30,000	19,826
			予備費	3,616	0
合計	393,616	384,616	合計	393,616	84,715

2. 2003年度事業計画

- (1)シンポジウム：他学会との合同シンポを含め、現在幹事会で検討中
- (2)「応用動物行動学」の編纂：編集委員会の設立
- (3)ISAEJapan2005準備組織委員会開催と準備委員会設立
- (4)家畜管理学会と共同の一般講演、学会誌の準備

(5) 2003 年度会計予算

収 入	支 出	
項 目	2003 予算	2003 予算
前年度繰越金	299,901	印刷製本費 450,000
個人会費	200,000	シンポジウム費 40,000
賛助会費	0	会議費 5,000
利息	10	通信費 25,000
雑収入	100,000	消耗品費 30,000
		謝金 10,000
		国際学会開催準備費 30,000
		予備費 9,911
合計	599,911	合計 599,911

お知らせ 「応用動物行動学の黎明」販売：残部少なし。急ぐべし！！
会員価格 1冊 1000円（別途 送料 300円：3冊以上なら送料無料）
支払い：書籍到着後、同封の振り込み用紙で
申し込み：ryokusu@center.equinst.go.jp
葉書は〒320-0856 宇都宮市砥上町 321-4 JRA 競走馬総合研究所 楠瀬良宛

2003 年第一回シンポジウム報告（2003 年 3 月 30 日 於玉川大学）

「使役動物の行動学・ヒトのために働く動物たち」をメインテーマに 4 名のシンポジストによる発表後、会場からの活発な質疑の時間がもたれました。会長挨拶にもあるとおり、非常に熱気あふれるシンポジウムでありました。ご参加の皆様には感謝申し上げますと共に、次回もふるってご参集下さることをお願い申し上げます。以下発表内容について私心を交えて、要約をしましたので報告します。

1. 一馬力の山林作業：小野耕平氏（東京農業大学）

かつて、集材作業には使役動物として馬、牛、時にはなんと犬（空のトロリー運びではある）が用いられてきたが、機械化に押され現在では限られた地域でのみ伝統的な使役動物による集材作業が行われているという。シンポでは畜力全盛期の貴重なたくさんの写真と現在も残る福岡・熊本における馬による集材作業の様子をビデオでみせていただいた。併せて、スウェーデンで現在も活発に行われている馬

搬作業についてもご紹介いただいた。馬搬作業に必要な種々の道具は、作業場所、作業種により選択が必要だという。機械化が進む中、使役動物によるこれらの作業の永続について氏は強く願っておられたが、参加者一同、芸術的とも言えるこれらの作業の様子を拝見して、意を同じくするものであった。

2. 鷹の使役を総合科学(Nexialismus)的に考える：波多野幾也氏（NPO 法人 日本放鷹協会）

始めに、鷹狩りを総合科学的にアプローチすると・・・と美しく図説してくださった。行動学・認知科学・分析学など種々の学問が組み合わさって学問として専門化されていくとのご主張に同意するものであった。が、なんと言っても実際にみせていただいた使役の実場面のビデオの印象が強烈でした。鷹狩りの様子を見るのはこれが初でしたので、画面中のハヤブサ・鷹・犬・そして獲物の動きを一心に見つめてしまいました。非常に心奪われる映像でした。ご覧になったことがない方は、是非次の機会に・・・鷹の馴致・水路づけの話、獲物を持ち帰る習性はないことから鷹匠が鷹の位置を正確に把握する必要性など関心の高い内容であった。

3. 動物園における動物ショー；動物の行動を魅せる展示としての試み：椎原春一氏（長崎鼻パーキングガーデン）

昨年度のシンポジウム「飼育動物の環境エンリッチメント」に即した内容であった。同ガーデンにおける動物ショーは、目的の行動達成の障害となる行動を誘発しない環境作りと目的の行動を誘発しやすい環境作りを基に、オペラント条件付けによる調教技術を活用して作り上げているという。小規模の動物園だからこそできることを念頭に置いて日夜努力されているようだ。実際にビデオでフラミンゴ、猫、チンパンジー、ウサギ、コンゴウインコなどのショーの様子をみせていただいた。魅力あるショーに仕上がっていた。今後も動物行動学・生態学をいかした動物舎作りや運動所作りにより、観客が安全かつ自然に近い状態の動物観察できるように配慮していきたいとのこと、応援したい気持ちにさせられた。

4. トレーニングにおいて犬はコマンドをどのように認識しているのか？：福沢めぐみ氏（De Montfort 大学）

本シンポジウムの中で唯一、研究報告としての発表であった。演者が留学先で研究しておられる内容の総括であった。動物の学習課程を考えたとき、特に犬の訓練を行っている者にとって、声符と視符の関係は興味深いものがある。犬が声符の発音の違いを認識すること、

同時に視符または(視符として指示者が認識していない)表情や動きによりコマンドへの服従確率が変動することなどが実験を通じて示された。経験的に当然そうだろうとおっしゃる向きもあろうが、実験でこれらを証明することは結構難しい。実験の設定についてフロアーから多くの意見が出されたことはこれを如実に物語っている。動物福祉を考えたとき、認知能力を十分に把握した訓練が望ましいとの演者の意見には全く同感で、今後のさらなる研究を期待したい。

編集後記：総会および当日の幹事会では全く話の出なかった「ニュースレター発行をせよ」との急な依頼をうけて「とりあえずはまず出してみよう！」とまとめてみました。内容には不備な点も多く(特にシンポジウム報告は老化が進んでいる事実を自ら知る機会となった)ご不満もありませんが、次回までには準備を整えたいと思います。会員の皆様に置かれましては、ニュースレターに対するご意見や掲載希望の記事などをお送り下さいますようお願い申し上げます。(内田佳子 記)